

祇王寵衰（大野恵造）

平ノ入道の寵妓王に鍾る

仍つて妓女亦世に推さる

相次いで更に清艶の女を見るや

則ち旧きを棄てて新たなるを己に仕えしむ

和歌 萌え出ずるも枯るるも同じ野辺の草

いずれか秋にあはで果つべき

草木榮枯を伴わざるはなし

仏は無常を感じ飾を落して去る

桃姉李妹経を誦するの秋

桜女来つて法類たらんことを望む

平入道寵鍾妓王 仍妓女亦被推世

相次更見清艶女 則棄旧令新仕己

草木莫不伴榮枯 仏感無常落飾去

桃姉李妹誦経秋 櫻女来望為法類

解説 清盛の前に仏御前が現れ、今まで寵愛されていた妓王が清盛の元から去る事を描いた詩。

語釈 ※平入道＝平清盛のこと。 ※寵＝非常に気に入られること。 寵愛。

※妓王＝平家物語に登場する白拍子。清盛に愛され、母娘三人で裕福な生活を送るが、仏御前に清盛の寵を奪われ、母娘とも尼となって嵯峨の庵でひっそりと暮らす。 ※妓女＝妓王の妹。 ※清艶＝清らかであでやかなこと。

※榮枯＝榮えることと、衰えること。 ※仏＝仏御前。加賀出身の白拍子。

※飾＝髪かざり。髪。 ※桃姉李妹＝妓王・妓女（この二人は姉妹）仏は当時の白拍子。この詩では妓王・妓女・仏の三人をそれぞれ「桃」「李」「桜」に擬した。 ※誦＝文章、詩歌、経文などを声を出してよむ。 ※法類＝仏教で、同宗同派に属する僧または寺。

※妓王の和歌通釈＝春に草木が芽をふくように、仏御前が清盛に愛されるのも、私が捨てられるのも、所詮は同じ野辺の草（白拍子）なのだ。どれも秋になって果てるように、誰が清盛に飽きられないで終わることがあるうか。

通釈 清盛の寵愛は妓王に集中し、妹の妓女も姉のお陰で世に羽ばたけた。ただ、清盛は美しい女性（仏御前）を見ると、今まで寵愛していた女性（妓王）を棄てる。このことを知った仏御前は妓王に無情を感じ、清盛の元から去る。そして妓王・妓女・仏は経文を詠む毎日を送り、法類になる事を望んだ。